

【モンテンプル刑務所】

天皇皇后陛下がフィリピンを訪問されておられる。大歓迎を受けている事は、日本人として大変喜ばしい事だ。終戦後のフィリピンで、こんなエピソードがあった事も忘れてはならない事。

「あゝモンテンプルの夜は更けて」

- (一) モンテンプルの夜は更けて 一つの思いにやるせない
遠い故郷しのびつつ 涙に曇る月影に 優しい母の夢を見る
- (二) 燕はまたも来たけれど 恋しわが子はいつ帰る
母のころはひとすじに 南の空へ飛んで行く さだめは悲し鳴子鳥
- (三) モンテンプルに朝が来りや 昇るころの太陽を
胸に抱いて今日もまた 強く生きよう倒れまい 日本の土を踏むまでは

昭和27年12月24日、フィリピン・マニラ郊外のモンテンプル刑務所に歌手・渡辺はま子の歌が流れた。聴衆は戦争犯罪人とされた元日本兵100余名である。12月とは言え40度を超す酷暑なのに、渡辺はま子は振袖を着て歌った。長い間、日本の女性の着物姿など見た事のない元日本兵達への心尽くしだった。この歌は、この刑務所の死刑囚たちが作詞作曲したものである。



渡辺 はま子

この曲が流れると、会場の中からすすり泣きが聞こえた。会場にいたデュラン議員が、当時禁じられていた国家「君が代」を「私が責任を持つ、歌ってよい」と言った為、全員が起立して祖国日本の方に向かい歌い始めた。多くの人は泣いて声が出ず、泣き崩れる者もあった。そしてこの歌によって、これらの人々を救い出す事になる。終戦当時、フィリピンには14万人の日本人捕虜がいたが、昭和21年のフィリピン独立後も、100人余の戦犯者がモンテンプル刑務所に収容されていた。この人達を何とか助け出そうと、僧：加賀尾秀忍(かがおしゅうにん)が、モンテンプルの歌が出来たら日本人の人々にこの思いが通じるかも知れないと考えたのである。加賀尾は無給のままモンテンプルの獄中の一室に住み、残飯を食べ生活していた。「この人達を救わないで、どうして僧と云えようか？」という強い決心からであった。

彼は死刑囚：代田銀太郎に作詞を頼んだが、ノートもない中、ヨードチンキでトイレットペーパーに詩を綴り、作曲は同じ死刑囚：伊藤正康が刑務所の中の教会で、オルガンを弾いて作った。こうして出来た歌を、加賀尾は、渡辺はま子に送った。死刑囚たちの作った歌は、歌手：渡辺はま子によりレコード化され、瞬く間に20万枚を超える大ヒットとなった。そして半年後の昭和27年12月24日、はま子はモンテンプルを訪れたのである。



作詞者代田銀太郎の故郷である長野県飯田市にある歌碑

加賀尾はちょうどその時、キリノ大統領と会見が許され、その時の土産として彼ははま子の「ああ モンテンプルパの夜は更けて」を贈った。大統領がこの曲は何かと尋ね、死刑囚が作ったものだと聞くと、大統領は大きくうなずいて「もう一度聞きたい」と言い、大変感動した様子だった。キリノ大統領の妻と3人の子供達は日本軍に殺されており、彼は日本人を憎みきっているにも関わらず静かに目を閉じポツリとつぶやいた。

「7月4日は我が国の独立記念日だ。その時二人だけを釈放してあげましょう」。加賀尾はこの時たった二人とはいえ、胸の内を語る大統領の言葉に「春は近い」と感じ取っていた。昭和28年6月27日、加賀尾に大統領から連絡が入り「独立記念日を機会に、一部の者に恩赦、釈放を与える。それに値する者を指名せよ」との事であった。ところが一夜明けると「死刑囚・無期刑囚」を全員釈放である。

その前日、日本から、はま子の歌に感動した日本人・500万人の戦犯釈放嘆願書がフィリピン政府に届けられたのである。この恩典を与えられた事は、日本国民の喜びをひとしくするところであると、日本政府はフィリピン政府の措置に対し、深く感謝の意を述べたのである。

昭和28年7月22日加賀尾僧正を含め110名と処刑された17体の遺骨が、日の丸を掲げた白山丸と共に横浜の大栈橋に着岸した。待ち受けたのは2万8千人もの大群衆と、はま子の「ああモンテンプルパの夜は更けて」であった。



横浜港に到着した白山丸

自分達が食べていくだけでも精一杯の時代に、はま子の歌は、異国に苦しむ同

胞への思いを目覚めさせ、500万人もの署名となってキリノ大統領を動かした
のである。こうした同胞への思いが、国家という共同体を根底から支える基盤
なのだろう。終戦後の混乱期に、日本人が忘れかけていた「同胞への思い」を歌
によって、目覚めさせてくれたのである。合掌。

平成29年12月23日
志雲会塾長 有馬正能